

第10回 留学生による 日本語作文 コンクール

入選作発表
2003年 9 月



主催・大阪鶴見ロータリークラブ
協賛・関西国際学友会日本語学校

大阪鶴見ロータリークラブ 国際交流基金について

1989年2月、当クラブは、RI第2660地区のインターシティ・ゼネラル・フォーラム（IGF）第6組の主催クラブとなり、そのテーマに「留学生問題を考える」を選定。大阪市立大学前学長木村英一氏にコーディネーターをお願いし、関西国際学友会専務理事浦野吉太郎、大阪市立大学教授佐藤全弘の両氏を講師として「留学生をめぐる現場から」という演題の基調講演をして頂いた。

またそれに引き続き、大阪大学、大阪市立大学、大阪府立大学、神戸大学、関西大学、関西国際学友会日本語学校よりの男女計35名の留学生

を囲むバズセッションを13クラブ約300人のロータリアンの参加で開催して、留学生に関する認識を深めることができた。

このIGFが契機となり、同年7月の創立5周年記念事業の一環として当クラブ独自の国際交流基金の設立が決議され、クラブ内で募金を開始した。基金の事業目的は「外国人に対する日本語教育の振興による国際的相互理解の推進」と定められた。

創立10周年を迎えた1994年、基金の利息と年度内の募金を原資に、上記事業目的に添って運営を開始したものである。

関西国際学友会日本語学校生による 日本語作文コンクール

当クラブは例年、鶴見区民まつりに「国際交流コーナー」で参加、地域社会とのふれあいを深めている。この催しには、第2660地区への青少年交換学生とともに関西国際学友会日本語学校生も招待されている。

同校と当クラブは、上記IGFを含めて特別にご縁があり、国際交流基金運営の最初の事業として、同校の学生を対象に日本語作文コンクールを開催することになった。

このコンクールは1994年を第1回とする5年間の継続事業であったため、1998年をもって当初の企画を終了した

が、是非継続をと希望する声が多く、さらに5年間延長して実施することとなった。本年はその継続第5回にあたる。

この10年間に日本語作文コンクールに応募された作品数の年次推移は、次ページの表と棒グラフに示す通りであるが、第10回の応募作品の減少は、生徒数の減少によるものである。

このコンクールへの応募資格は、関西国際学友会日本語学校の在校生（4月末日現在）で、同校のスピーチコンテストに準じて初級、中級、上級とクラス分けをし、日本語習得年限によるハンディキャップの解消を狙ってい

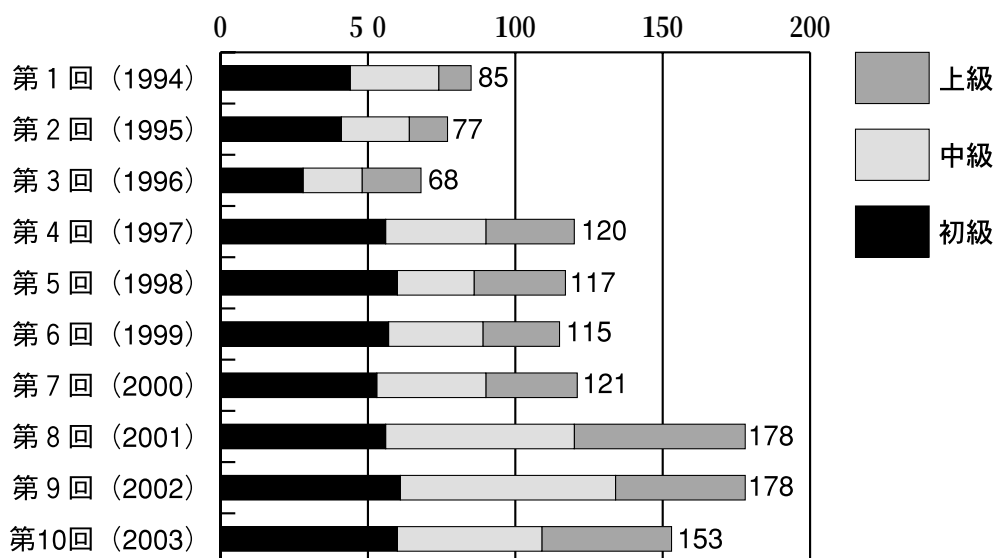
る。賞金は各級とも最優秀賞 5 万円 1 名、優秀賞 3 万円 2 名、審査員特別賞 2 万円 1 名で、合計 12 名を表彰する。審査員特別賞は、漢字に対してのハンディキャップを有する非漢字国出身者に贈られる努力賞である。

なお、選に漏れた参加者全員に参加賞が贈呈される。作文のテーマは自由、ただし、原稿は自作、かつ自筆・未発表のものに限り、クラブ会報等への掲載の権利は当クラブが有している。

関西学友会 日本語学校 留学生参加 日本語作文コンクール応募者数の推移

	初 級	中 級	上 級	総 数
第 1 回 (1994)	44	30	11	85
第 2 回 (1995)	41	23	13	77
第 3 回 (1996)	28	20	20	68
第 4 回 (1997)	56	34	30	120
第 5 回 (1998)	60	26	31	117
第 6 回 (1999)	57	32	26	115
第 7 回 (2000)	53	37	31	121
第 8 回 (2001)	56	64	58	178
第 9 回 (2002)	61	73	44	178
第10回 (2003)	60	49	44	153

大阪鶴見ロータリークラブ 国際交流基金運営委員会 (2003 年 7 月 1 日)



第10回作文コンクール入賞者

初級

最優秀賞

THAI KHY UY (カンボジア)
タイ キーウイ
「家族がいっしょに住むほうがいいです。」

優秀賞

蔡 麗如 (台湾) サイレイジョ
「私の感じた日本」

JOSE ALARCON MEJIA (ペルー)
ホセ アラルコン メヒア
「宝くじ」

中級

最優秀賞

王 晨 (中国) オウシン
「小」

優秀賞

UMEYAMA MATSUMOTO
LORENA SAYURI (パラグアイ)
ウメヤマ ローレナ
「あなたはパラグアイ人ですか
日本人ですか」

張 竹吟 (中国) チョウチクギン
「おもしろい日本語の漢字」

審査員特別賞

CHOO TZE TSU TOMOKO (マレーシア)
シュトモコ 朱 智子
「彼も一時なり 此れも一時なり」

上級

最優秀賞

徐 智宏 (台湾) ジョトモヒロ
「台湾における日本語」

優秀賞

謝 敏 (中国) シャシン
「心に夢を 君には愛を」

王 衛娜 (中国) オウエイナ
「理解を深め合おう」

審査員特別賞

TSASAN TUMURKHOU (モンゴル)
ツァン トムルホー
「私は医者になりたい」

初級参加者 60名

JOSE ALARCON MEJIA (ペルー)	金 在植 (韓国)	DAYANAND SINGH (インド)
THAI KHY UY (カンボジア)	許 琳 (韓国)	RAHMAN MAHBUBUR (バングラディシュ)
MALLAM CHRISTOPHER LEWIS (フィジー)	李 周眩 (韓国)	HOSSAIN S.M NAZARAT (バングラディシュ)
蔡 麗如 (台湾)	肖 霄 (中国)	ZOHA MAMUN UZ (バングラディシュ)
李 博 (中国)	陳 草 (中国)	SEMIONO DAVID PETER (タンザニア)
鄭 紋紋 (中国)	HLAING MYINT OO (ミャンマー)	MKENDA ROGAT SEBASTIAN (タンザニア)
武 冰玉 (中国)	CHEONG YEN SAN (マレーシア)	JAVILE MONETTE VILLANUEVA (フィリピン)
印 仁斌 (中国)	OYUNT SEREN MUNKHBAT (モンゴル)	朱 連喜 (中国)
趙 茜 (中国)	TSEG MED GANHUYAG (モンゴル)	呉 蕾 (中国)
梁 泰儀 (台湾)	TOUCH NARONG (カンボジア)	高 后廷 (韓国)
姜 東昭 (中国)	PAPHASSARANG SOMPHACHANH (ラオス)	王 淑萱 (台湾)
褚 金鑿 (中国)	THAMMAVONG PHOUVONE (ラオス)	NGUYEN NGOC TAM (ベトナム)
ALORA GANIELL PINEDA (フィリピン)	LEE ALLAN YING LING (アメリカ)	何 麗芳 (中国)
史 云嬌 (中国)	YULO HOMER CARAIG (フィリピン)	夏 麗濱 (中国)
沈 宏吉 (台湾)	MANASDEEP SINGH (インド)	王 亭琇 (台湾)
王 真理 (台湾)	MATHEW PANJU (インド)	楊 俊嶺 (中国)
李 小明 (中国)	GBADIE NOHON FLORE (コートジボワール)	丛 榛 (中国)
李 默 (中国)	TAKI KOFFI ALPHONSE (コートジボワール)	文 乾旭 (中国)
李 碩丹 (中国)	OUATTARA AMADOU (コートジボワール)	李 慧 (中国)
崔 薇薇 (中国)	NDIOGOU DAOUDA FALL (セネガル)	鄭 慧京 (韓国)

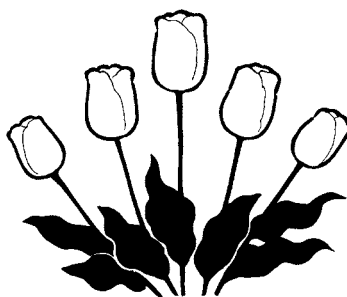
中級参加者 49名

UMEYAMA MATSUMOTO LORENA SAYURI (パラグアイ)	THIO STEFANUS CHANDRA (インドネシア)	康 玟晶 (韓国)
張 竹吟 (中国)	THANDA LIN (ミャンマー)	彭 紫萍 (台湾)
CHOO TZE TSU TOMOKO (マレーシア)	宋 文玲 (中国)	陳 志銘 (台湾)
金 寶煥 (韓国)	蘭 磊 (中国)	王 歆 (中国)
周 方偉 (台湾)	王 宜盈 (台湾)	吳 浩瑜 (台湾)
王 晨 (中国)	王 亭茹 (台湾)	常 彬彬 (中国)
周 怡萍 (中国)	刘 嘉 (中国)	李 定安 (台湾)
鄭 哲旻 (中国)	徐 俊杰 (中国)	李 中亭 (中国)
MELINDA SIVI MILTON (アンゴラ)	金 順善 (韓国)	孫 樂平 (中国)
張 丹 (中国)	劉 惟熠 (台湾)	林 欣儀 (台湾)
娄 亞旻 (中国)	羅 振人 (台湾)	王 麗萍 (中国)
陳 海梁 (中国)	岳 鵬 (中国)	董 琨 (中国)
文 亮川 (台湾)	林 代紅 (中国)	于 洋 (中国)
邵 瑋瑋 (中国)	孟 佳婕 (中国)	胡 駿 (中国)
黄 彦嵐 (台湾)	侯 松杰 (中国)	律 燁 (中国)
鈕 佳穎 (中国)	孫 郡阳 (中国)	
王 天立 (中国)	李 英 (中国)	



上級参加者 44名

王 衛娜 (中国)	鄧 黎 (中国)	吳 亞楠 (中国)
王 筱徑 (中国)	于 坤 (中国)	TIONG FONG HEE (マレーシア)
TSASAN TUMURKHOU (モンゴル)	張 宁 (中国)	張 春穎 (中国)
尹 美蘭 (韓国)	王 高干 (中国)	王 小潔 (中国)
東 冠余 (台湾)	KOIDE FERNANDO (ペルー)	
李 云芳 (台湾)	曹 軼瑤 (中国)	
周 春華 (中国)	楊 博 (中国)	
吳 春連 (中国)	郭 英華 (中国)	
謝 敏 (中国)	白 穎暉 (中国)	
SHIRAISHI TELLO DEYLY DAYANA ROSS (ペルー)	伍 露 (中国)	
徐 智宏 (台湾)	柴 毅 (中国)	
PUSPITA WINAWATI (インドネシア)	FITRIA WIRIASUGATA (インドネシア)	
蔣 志俠 (中国)	張 蕾 (中国)	
李 丹 (中国)	LIHO CHEUNG (イギリス (香港))	
洪 正光 (台湾)	吳 膺義 (台湾)	
葛 潤美 (韓国)	M.P.NILANGA PRASAD KULAWANSHA (スリランカ)	
金 熙竣 (韓国)	王 蓓 (中国)	
KOO YAN YEE (マレーシア)	李 美善 (韓国)	
袁 晟 (中国)	王 灵 (中国)	
朱 文鶴 (中国)	郭 姿岐 (台湾)	



家族がいっしょに住むほうがいいです。

THAI KHY UY (カンボジア) タイ キーウイ

最優秀賞 (初級)

土曜日に豊中交流センターで友達のホストファミリーに会って、それから家をたずねました。ピアノがじょうずな、そのホストファミリーのむすめの生活は私が考えた次のお話と同じだったので話してあげました。

男の子とお父さんはいっしょに住んでいます。その男の子の引出しの中に千円さつがあるんです。彼とお父さんはいっしょに時間をすごすことがありません。お父さん朝早くしごとへ行きます。彼はまだおきません。お父さんがよる家へ帰る時は彼はもうねています。彼はお父さんが見たいとずっと思っていました。お父さんはしごとで一時間二千円もらいます。ある日、彼は夜たいへんおそくまでソファーに座って、お父さんをまっていました。お父さんはドアを開けて彼を見ました。そして彼に「どうしてねないんだ？とてもおそいのに。」と言いました。けれども彼はぜんぜん答えませんでした。千円を要求するということのをぞいて。お父さんはしごとから帰ってつかれていたのもむすこに腹を立てました。「どうしてお金がいるんですか。あげない」お父さんはむすこにた

くさん言いました。男の子はもう一度「千円がほしいです。」けれどもお父さんは大きい声で「あげない」彼は涙を流して、へやに入りました。お父さんはむすこがかわいそうだと思って、むすこに千円をあげました。彼はお金をもらおうと急いで引出しからもう一枚の千円さつを出していっしょに二千円お父さんにあげました。男の子はお父さんに「この二千円でお父さんの一時間を買うことができますか。」と言いました。

私の意見は、お金も重要ですが、家族はもっと重要です。特に子供は父母といっしょにいる時間が必要なのです。

私の感じた日本

蔡 麗如 (台湾) サイ レイ ジョ

優秀賞 (初級)

台湾で一生懸命働いて貯金をしてやっと日本留学の夢がかないました。毎日が嬉しくて楽しくてたまりません。雨の日も毎日自転車で通学しています。クラスメートと日本について話し合ったり、週末は日本の友達と色々な所へ行ったりしています。日本で2ヶ月間生活をして私が感じた日本について書きます。

街や道が綺麗で、多くの家の玄関には花があり、日本人の清潔で綺麗好きな国民性が実感できました。また、車は歩行者や自転車を優先して運転しているし、スーパーではお客さんが小銭が不足して困らないようレジに小銭を用意してあることなどやさしさを感じました。デフレと言われていますが、物価はやはり高く、日本人も生活が苦しいと分かりました。びっくりしたことや疑問に思ったこともあります。電車の中でお化粧をする女性がいることや携帯電話を使う人がいないことです。またお寺に入るのにお金がいることやスーパーでは必ず袋をくれることです。

台湾では電車の中では読書をする女性が多くお化粧する女性はいませ

んが、携帯電話は所構わず使っているさいです。日本人は静かに話す人が多いですが若い人はそうでもありません。お寺に行くのは心の問題なのにお金がいるのは理解できません。スーパーの袋は何回も使えるのであたしはスーパーでは袋をもらいません。日本人はそうでもない。

私は日本が好きです。色々な所に行き、多くの日本人の友人をつくって日本や日本人についてもっと知りたいです。そして日本のいい所やすばらしい所、台湾と日本の違うところを台湾人に知ってもらえる仕事について、台湾と日本がもっといい関係になるよう努力したいと思っています。そのためにも日本語を一生懸命勉強して日本語のレベルをあげ有意義な留学生活を送りたいと思っています。

宝くじ

JOSE ALARCON MEJIA (ペルー) ホセ アラルコン メヒア
優秀賞 (初級)

一九八五年から一九九十年まで、ペルーはとても苦しい時期にありました。たくさんの人が仕事を探すために外国へ行きました。そして、私も一九九一年に日本へ来ました。飛行機を降りると、どちらを向いても同じ顔です。知り合いもいないし、言葉もわからないので、最初の半年は苦しいことばかりでした。それでも、日本語が通じるようになると、いい仕事が見つかりました。最初の3年間は、家族の借金を返すために働きました。それからいろいろなところを転々としてきましたが、なかでも関西が一番好きです。少しふるさとと似ていると思います。

友達と一緒に踊りに行ったとき、ある女性と出会いました。それが妻です。私はそのとき妻が誘ったと言い、妻は私が手を引っ張ったと言います。あるとき妻に「あなたは私の宝物」と言ったのですが、妻は笑い転げました。何がおかしいのかわからないので聞くと、私はこう言ったのだそうです。

「あなたは私の宝くじ」

ペルーでは、大学に行くチャンスがなかった私ですが、ずっと勉強をした

いと思っていました。今、こうして勉強していただけることは、私にとって、信じられないほど幸せなことです。家族や周りの人にも、願い続ければ夢がかなうということを証明できたと思います。時々私は自分のことをイノシシのようだと思います。前へ前へ、とにかく前へ。曲がり角にぶつかったら、きっと転んでしまうでしょう。それでもきっと走り続けていると思います。

日本は私の国ではないし、ここで勉強するのは難しいことですが、一生けんめい勉強すればできないことはないと思います。最初から、できないとあきらめるわけにはいきません。宝くじも買わなければ当たらないのです。

この学校を卒業した後、みんな新しい人生へと進むことになります。ここで一緒に勉強した先生や仲間を忘れないで、未来のためにがんばります。信じてればきっと夢はかないます。

小

王 晨（中国） オウ シン

最優秀賞（中級）

三月二十六日、私は初めて異国の土地に足を踏み入れました。その時から私はこの国の“特別”を感じ始めました。異国の多くのことに新奇な感覚を覚えました。そしてその中で一番感嘆させられたのは、一台の小さなスクレーパーでした。そのスクレーパーは中国で見たものの三分の一しかないのです。その時から、私は日本にある“小”に注意し始めました。二か月たった今、日本にある“小”はますます多く発現してきました。

中国で生まれ育った私は、今まで多くの時に“大”の立派さと広さを感じてきました。しかし、日本に来てから、“小”の魅力と精華を探そうと思うようになりました。“小”は日本人の日常生活などあらゆる所で具現します。例えば、あなたは町中で散歩している時、狭い道端に小さな家があるのを見たことがありますか。きっとあるでしょう。そしてそこに一人か二人だけが乗れるような小さくてかわいい車が停まっています。もう少し歩いて、デパートに入ったら、一人用の“小”炊飯器や洗濯機や冷蔵庫などが見られます。又、コンビニなどの小売

り店では、小さく包装してある食品やジュースが手軽に買えます。“小”はもう日本人の生活のあらゆる方面に浸透していると思います。

時代の発展につれ、日本人にとって“小”は元々の意味を越え、“軽くて便利で精密なもの”の代名詞になってきました。同時に、“小”は日本の名を世界に知らせています。それには、体積が最小で、容量が最大の電池、一番軽くて薄い携帯電話、一番薄いプラズマカラーテレビなどがあげられます。そのほかビデオやカメラやコンピュータなどのソフトウェアやハードウェアなどの領域においても“小”は日本のブランドを守っています。特にシステムコンポでは、世界中の人を感服させています。

もっと深く観察していくと、経済領域においても“小”は別の意味で存在しています。日本では、大型のスーパーやレストランやショッピングモールは少ないけれど、小売り店やコンビニなどが点在しています。それにそれらのお店はほとんどチェーン店です。セブン・イレブンやイトーヨーカ堂は小売り業の中ではたくさんの業績を得

られています。そのため、世界中の同業種のお手本になっています。

周知のように、日本は細長い島国であり、土地が少ない。しかし、反面人口が大変多いです。そのため、日本人はものを小さくしようと考えたのかもしれない。発展とともに、日本人は自発的に、特別な領域で“小”を見なおして、探求し続けてきました。又、“小”に多くの内包を与えました。現在では、“小”はすでに日本の文化、伝統になりました。

私は今“小”について大変興味があります。留学期間を通じてもっと多くの“小”文化を見つけ、更なる認識と理解ができたかなと思っています。

おもしろい日本語の漢字

張 竹吟 (中国) チョウ チクギン

優秀賞 (中級)

日本語の漢字といえば、日本語を勉強する外国人は難しいと思ったかもしれません。それは大変だと思える時もあるでしょう。確かに、日本語には漢字の成り立ちがいろいろあって、簡単ではありません。象形文字とか、形声文字とか、もともとは中国伝来のものですからたいていは中国語の漢字と同じです。国字というのは日本人が作り、日本語にだけある漢字です。それに、読み方も訓読みと音読みの二つに分けられています。同じ読み方をする漢字が何種類もあります。中国人でも全部分かるとは限りません。

しかし、日本語を勉強する時間が長くなるにつれて、日本語の漢字に対する理解も深まってきました。特に、中国語の漢字の書き方と全部同じ、けれども意味が全然違う時、ほんとに理解していなければ、時々おもしろい誤解をします。

私ははじめて「手紙を書く」という文を見た時、たいへんびっくりしました。えっ、どうして「トイレットペーパーを書く」と書いてあるのでしょうか。変ですね。トイレットペーパーはトイレに行く時使いませんか。

字引を引いた後で、なんだ、この「手紙」の意味は中国と全然違うとわかりました。中国語では「手紙」の漢字を「信」と書きます。

「湯」もおもしろい日本語の漢字の一つです。中国語の「湯」は「スープ」という意味ですから、おふろ屋をレストランとまちがえる中国人留学生もいます。それで、今、おふろ屋は漢字の「湯」のかわりにひらがなの「ゆ」と書くのです。そうすれば、おふろ屋をレストランとまちがえる人がいなくなるでしょう。ほかに、日本語の「大丈夫」は「構わない」の意味ですが、中国語では「男子漢」といって、「大の男」の意味です。日本語の「小心」は「気が小さい」の意味ですが、中国語では「気をつけて」の意味なのです。このように同じ漢字でも意味、使い方の全く違うものが数多くあります。

漢字圏から来た皆さんも誤解したことがあるのではないのでしょうか。日本から見れば、中国は何ととっても漢字の本家です。けれども、反対に漢字がわかるからこそ中国人にとって日本語の漢字の読み方、書き方、使い方と意

味が難しいと思う時もあるのです。

漢字は日中の文化的交流の橋としてたいへん重要です。日中両国では漢字の使い方が微妙な相違だけの時もありますが、全く違うこともあるのです。けれども、相違があるからこそ興味が深まり、日本語の勉強がもっとおもしろくなります。ですから、皆さんも頑張って日本語の漢字を勉強しましょう。

あなたはパラグアイ人ですか 日本人ですか

UMEYAMA MATSUMOTO LORENA SAYURI (パラグアイ) ウメヤマ ロレーナ

優秀賞 (中級)

私の祖父母はやく四十五年前に家族全員を連れて日本から南アメリカのパラグアイへ移住しました。私の母は日本生まれ、父はパラグアイ生まれなので、私は日系パラグアイ人の三世です。

父と母は日系人なので、私はパラグアイ人ですが、顔は全然パラグアイ人みたいではありません。これは子供のころから問題でした。

今日はパラグアイでもアジア人が多くなってきましたが、十五年前、私が幼稚園へ行き始めたころはずいぶん少なかったです。私は学校全体でたった一人のアジア人でした。それで外の生徒に指を差されて「チーナ、チニータ」としよっちゅう言われました。

「チーナ」というのはスペイン語で中国人のことですが、私の国ではアジア人はみんな「チーナ」です。学校だけでなく道を歩いている時もいじめられた事が何回もあります。

今まで日本人の家族と育ってきた私には毎日こんな状況で過ごすのは辛かったです。二年生になったころはもう慣れて幼稚園の事も忘れました。

小学校と中学校の時スペイン語と英

語の勉強もパラグアイ人と同じになれるようにがんばりました。それから友達もたくさんできてとても楽しかったです。

パラグアイでは中学校が終わると学生はそれぞれ自分が好きな学部を目指していろいろの高等学校に分かれます。ですから、中学の卒業式の後の一週間は友達と遊んでばかりいました。次はこの一週間の間におこった事です。

私は友達たちと一緒にクラブへ踊りに行きましたが、私はアジア人だったので入らせてもらえませんでした。子供のころいじめられた事がありましたが、こんな差別されたことは初めてでした。友達たちはそのクラブの主人に反対して「こんな変な所にはけっして入りたくない!」と言ってみんな一緒に外の所へ行きました。その時私は本当に親切な友達がいてうれしいと思いました。

親切な友達がいる事もいいですが、私がいなければみんなはそのクラブに問題なく入れたらうと思いました。それで十五年ぶりに国籍の心配がでてきました。その時、日本へ行ったこと

が無かったですが、日本へ帰国したいと思いました。

けれども、しばらく考えてみると私は日本人の顔をして、日本語の会話も下手だし、読み書きもよくできないので、日本へ行っても今度は日本人に差別されるだろうと思いました。

十八歳になると国籍をきめさせられました。どっちを選ぶか何度もくりかえし考えました。日本とパラグアイを比べました。始めは料理です。私はパラグアイ料理が大好きです。日本料理ではおすし、カレーと焼鳥しか好きではありませんでした。家族で御祝いをする時はいつもアサードというパラグアイの典型的な料理とおすしが同じテーブルに並べてあります。私はこのミックス習慣で育てられましたのでパラグアイの習慣の十五歳のパーティもしましたし、日本の習慣の成人式もしました。けれども、もう一度考えてみると、学校ではスペイン語、友達はほとんどパラグアイ人、ダンスは好き、なっとうは嫌い。では、私はパラグアイ人。

この状態で日本へ来ました。ところが私は日本に住んでいるとカレー、焼鳥、おすし以外に外の日本料理が好きになりましたし、日本の音楽や生活に憧れましたので、ますます私はパラグアイ人でなく、日本人だ思うようになりました。そして、もう一度「私は

どこも人。」という考えが浮かんできました。

日本での暮らしはたいへん楽しいです。人々は親切だし、日本語学校や寮ではいろいろの国の友達ができました。日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語で話したりしていると私の考え方も変わりました。今はただのどこも人かパラグアイ人か日本人でなく、私は世界人だということが分かりました。

このように、私だけでなく、世界の人々が国々に別れずに一つの世界人になれば戦争もなくなると思います。では、みなさん、世界人になりましょう！

彼も一時なり 此れも一時なり

CHOO TZE TSU TOMOKO (マレーシア) シュ トモコ 朱 智子

審査員特別賞 (中級)

日本にいたこの2か月間で、マレーシアでは到底経験出来なかったような貴重な体験をさせていただきました。

中学校の時、ある歴史の授業で先生が第二次世界大戦中、自分の家族が日本軍によって、殺されたという事実を教えてくださいました。当時日本軍は現地に住んでいる華僑だけに対し、赤ちゃんを日本刀で串刺しにするとような事をして遊んでいました。そんな事を授業で聞かされれば、日本人に憎しみを覚えるのは当然です。怒りの矛先は日本人の母をもつ私にむけられました。そして、その授業から態度は一変。全校生徒から無視され、放課後にバスに乗れば周りの人から「日本犬!」と悪口雑言を浴びせられました。「日本犬」という言葉は中国人にとっては、大変な侮辱の言葉です。今まで仲良くしていた友達からもそのような扱いをされ、味方は一人もいませんでした。その日、家に帰り、私は母親に暴言を吐いてしまったのです。しかし、偉大な母は叱るでもなくただ小声で「日本は確かに悪かった。でも、あなたの祖父は断固として戦争に反対していた。」と教えてくれ、日本にも

沢山そんな人がいたという事をはっきりと理解しました。そして、翌日、私は母が教えてくれた通り学校でその事を皆に言いました。しかし、昔の日本人がマレーシアにいた華僑の先祖を殺したという事実は変わらないと言われたので、毎日憂鬱だった事を覚えています。その時、私は絶対に日本で勉強すると決めました。そして、母の言葉を皆に実証するために一人で日本に渡りました。

五年程前に決まった事が今年終に実現しました。日本では学生寮に住む事にしたのですが、何より困った事はやはり私の悩みを聞いてくれる人がいなかったことです。友達も一人もいないし、話し相手が欲しかったので、何度国へ帰ろうと思ったか解りません。しかし、そう思うたびに、「自身との闘いに勝つために日本に来た」事を思い出し、前よりもっと頑張って勉強しようと再び決意する事ができました。そんな時、父が初めてくれた手紙の「見つけるまで探せば骨折りは無駄にならないだろう」という一節にとっても感動し、心から俄然「急がず休まず」と自分の心に誓いました。その後も何度か

壁にぶつかりしましたが、その度に自分なりの勉強法を考え、悩みながら少しずつ進んで行きました。

日本語学校に入った時、私には大きな不安がありました。授業のことはもちろん、十七才の女の子だと言って虐められないだろうかと、人間関係が一番心配でした。しかし、その心配は始業日にすべて払拭されました。というのはクラスではあまりにも嬉しくて泣きたいぐらいいろんな国の人と友達になった事です。特に、私と同じ四月に入学した台湾の消珊さん。彼女は私が一番がっかりした時に、「それ自体不可能なことはあまりない。ただわれわれには、ぜひとも成し遂げようという熱意が、そのための手段以上にかけているのである。」と力強く教えてくれた。

彼女の言葉を信じ、実証するために、早速猛勉強に取り組みました。そのお陰で、今は常に満足できるまで諦めない不屈の精神を身に付ける事ができました。ところで、私は消珊さんの一生涯の友情を固く誓いました。

「ドアを叩き続ければ、誰かが起きてくれる。一度や二度の失敗にくじけず、何度でもトライすれば、きっと道が開ける」私は、父親の指導通りに学生寮や学校生活を過ごしてきました。勤勉は幸福の源である。苦境に陥っている時も、勤勉に努めさえすれば、

きっと苦境から脱出できるだろうと私は思います。

その通り、私は日本語を聞いて理解することができるようになっていて、勉強の楽しさを改めて実感しました。そして、日本の方は親切に教えてくれ、自分に日本人の血が流れていることを誇りに思うようになりました。

台湾における日本語

徐 智宏（台湾） ジョ トモヒロ

最優秀賞（上級）

昨年、台湾の国慶日の祝賀大会で、ある出来事が起きた。海外に住む華僑を代表してあいさつをした羅さんが、締めくくりを日本語で言ってしまったのだ。相当に緊張していたせいか、最後に「この会場の大勢の方々のご健康を祝し、あいさつとさせていただきます」と日本語が飛び出した。この大会初の珍事に、野党の国会議員は、日本の植民地時代に帰ったみたいで気持ち悪いと反発し、責任者の処罰を求める声も出た。

その出来事から、民族意識や歴史上の憎しみをぬきにして、今の台湾には、日本語があふれているという現象が感じられる。ある台湾人の日本語教師によると、台湾は日本以外で日本語を学ぶのに最もよい学習環境だという。

台湾における日本語には、周知の事実だが大きく分けて戦前と戦後のそれがある。戦前の日本語といえば、今も保たれている台湾の町の名前がはっきりした証拠である。たとえば、私の出身地である高雄には、もともとそこにいた原住民が、「打狗（D A G A O）」という名前をつけた。その後日本人の統治者がその発音に基づいて、

高雄に変え、現在もそれが使われている。その他の例として、萬華（本来は艋舺 MANGA）、西門町、岡山、関西、美濃などがあげられる。

戦前、日本語は日常生活の言葉遣いにも影響を与えるようになった。戦前世代の人が日本の教育を受け、年を取るに伴って、身につけた日本語を自然に自分の子供や孫に伝えて来たからである。そのため、現在の台湾には、「本当?」、「おいしい」、「大丈夫」というような短い単語と中国語を混ぜて使っている人が少なくないと思う。

だが、時の流れとともに、本来の意味を誤って使うようになった例もある。私の母親は祖父から日本語の言葉をたくさん習ったから、家で犬をペットとして飼う時に、日本語の名前をつけた。不思議なことに、茶色の毛のそのポメラニアンは、「シロ」というふさわしくない名前をつけられたのである。そのうえ、母親は「イノシシ」をいつも「ヤマブタ」と呼んでいる。日本語を勉強している私にも、多少の悪い影響が及ぶのではないかと心配している。

戦前のは日本の植民地政策によって

強制されたものであるのに対して、台湾に戦後世代の人たちが。自分の意志で習う日本語も増えつつある。特に若者だ。彼らは日本のドラマ、漫画、芸能界、アニメなど、つまりあらゆるファッションに憧れ、それをきっかけとして、日本語の勉強は台湾でブームになった。いわゆる「哈日族」の若者は、日本語の勉強を通じて、現代日本の流行文化を深く理解することができるようになった。その一方で、「哈日族」のおかげで、新しい中国語が日本語から「逆輸入」された。「超人気」や、「気持」、「援助交際」というような日本語からの外来語が、現代の台湾の中国語に含まれている。こんな現象がこのままいくと、中国語の本来の美しさが失われ、文化面では再び日本の植民地にされることを危ぶむ人もいれば、中国語の包容力と多様化を強めると考える人もいる。私は、日本語も和語、漢語と様々な国の外来語から成り立っているが、もともとの日本文化は今までも保存されているから、文化流失の心配はいらないだろうと思う。

ところで、日本人でさえ納得できない「台製和語」も台湾で使われている。それは二つ以上の日本語単語をもとにして、台湾人の考え方や中国語の文法を混ぜて作られたものである。典型的な例として「頭コンクリート」というのがよくあげられる。形容詞と助

詞が省略され、二つの名詞から構成されたこの単語は、正確な意味は「頭がコンクリートのように堅い」で、頑固な人を形容する言葉である。もう一つ使い方が似ているのは「頭ショート」で、「愚かしい」、「ばからしい」というものである。台湾人はよく知っているのだが、日本人に対して使うと、まるで外国語のように通じないのだ。

地理的にも歴史的な由来から見ても、日本と台湾の関係は「唇亡びて齒寒し」のように切っても切れない。さらに、この頃、二国間の経済の交流も盛んである。それに伴い、文化のかけ橋として日本語が使われる機会も多くなった。同じ漢字圏であるおかげで、台湾人にとっては日本語の勉強は先天的に外の国の人より有利だ。言葉を通じて、お互いの理解が深くなっていき、友好の糸もしっかり結ばれるようになった。

今度、日本の方々にも「台湾風日本語」を体験しに来ていただきたい。

心に夢を 君には愛を

謝 敏 (中国) シャ シン

優秀賞 (上級)

「ああ、疲れた！」部屋に入るなりベッドに倒れ込む私。鞆の中からキンキ・キッズのCDを取り出し、ボタンを押し、イヤホンに耳につけて、すぐに若さあふれる二人の声が軽快なメロディーに乗って耳の周りでこだまする。「心に夢を君には愛を、いつも忘れないように……」だんだん、彼らの声が遠くなっていく……

私はごく普通の女の子だが、子供の頃には、夢を抱いていた。それは自分が自分の人生の舞台の上で、スポットライトを当てられてカメラに追いかけられる主役になることだった。有名な記者になるのが夢だった。

月日が経つにしたがって、私も成長していった。この点数次第の学歴社会でいかにいわゆるいい学生になるか、いかに両親が私のためにしいた道を歩んで行くかを学んでいった。けれども、これと同時に、私が夢と現実の間には乗り越えられない壁が存在するのだと意識した時から子供の時の夢はあとかたもなく心の中から消えてしまった。そう、「同じ石の上に三年も座るな！」

高校卒業の直前、留学のチャンスが

あって日本に来た。来日してからもそんなに興奮したり失望したりしなかった。上海ででも大阪ででも、生活というものはまだ続いていくからだ。唯一の変化は、私が自分の生活のためにお金を稼がなければならないことである。幸運なことに、私は初めて応募したアルバイトに採用された。それで、唐揚げ屋さんとして、私のアルバイト生活が始まった。しょせん、私は人生という劇の中では、ただの脇役にすぎない。脇役は現実という監督の指示にきちんと従って演じるので十分だ。夢だというのは脇役にはぜいたくなそしていらぬものなのである。

私と一緒にアルバイトをしているのは市川という女の子だ。初めて会った時、私が日本語がほとんど話せなかったのも、コミュニケーションがとれなかった。しかも市川さんは私より九歳も年上だ。だが、不思議なことに私達の間には言葉の壁や年齢のギャップなど全く存在していない。一つの動作や目の動きだけで、相手が何を言いたいのかすぐ分かる。日本に来て以来初めての友達ができたのだ。

唐揚げ屋さんなので、夏になると、しめ

りけたっぷりの空気に油の匂いが混じり、熱さで蒸発しそうになり、いらだたせる。何度も何度も泣きたい気分になり、一体どうして親元を離れて、はるばる大阪まで来てしまったのかと自分に問いかけた。胸の奥で何かが弾けるのを感じたが、あれは何か、分からなかった。

私はもうやめようかと何度も思っていたが、不思議だったのは、市川さんがいつも鼻歌まじりで、元気よく働いていることだった。課長から彼女がもう十年以上もここで働いていると聞いた。その十年間に何度も正社員になれるチャンスがあったのに断ったそうだ。信じられなかった。どうして市川さんが十年も働いたのに正社員にならないのか大変気になったけれども、ついに聞き出せなかった。

ある日、後一時間ぐらいで仕事が終わる時、いきなり市川さんから「敏ちゃん、何か夢あるの？」と声をかけられた。

「エッ？」一生けんめいクーラーの調節器を操作してた私はそう聞かれても、急に答えられなかった。「国公立大学に入ることかな。」ちょっと考えてから、私はこう答えた。

「で、後は？」

「後？」頭がぱっと真っ白になった。「分からないな。」

「はっ！ないの？」市川さんはびっ

くりした表情を見せた。「あかんわ！まだ若いのに。」

「市川さんは？」私は聞き返した。

「私？パン屋さんになりたいわ。」

「どうして？」

「う～ん、子供の時かあちゃんがいつもおやつにパンを買ってくれたんだよ。それがおいしかったから、いつか大人になったら自分で作ったパンを他の子供に食べてもらっておいしいと思ってほしい。」

「えらい夢やなあ。」自分の夢を言いながら目をキラキラさせる市川さんを心から羨ましく感じた。「私、子供の頃、記者になりたかった。」と言った瞬間、私は自分でも驚いた。もう忘れたと思っていた夢をなんと鮮明に覚えていた。心の中にずっと住みついていたのだ。

「メチャええ夢ちゃうか？」

「うん、けど長い間は忘れていた。」市川さんの前では、自分をさらけ出したかった。

「何や。夢は忘れられるもんじゃないよ。人に大切にされるもんだよ。」初めてこんな真剣な顔をした市川さんを見た。彼女の話はまるで明るい道しるべのように、濃い霧の中でさまよっている私に前方の道を示してくれた。

「ブブブー」携帯のアラームが鳴った。アルバイトの時間だった。ちょっと背伸びをしたら、そばのCDがいつ

の間にか止まっていた。

先週、ついに市川さんは十年間のバイトで貯めたお金でパン屋を開店した。これを知った私は心から彼女のために喜んだ。そうだよ、私も頑張るわ。自分の夢のために、頑張っていく。市川さんとの友情の花をさらに美しく咲かせるために、頑張っていきたい。

あらためてイヤホンをつけ直して、自転車に乗った。耳に再びキンキ・キッズの曲が響き出した。

「心に夢を君に愛を、いつも忘れられないように。きらめく夢の破片を拾い集めたなら、二人で陽射しをあびて、深呼吸してみよう、すぐにきっと叶うはずさ。」

理解を深め合おう

王 衛娜（中国） オウ エイナ
優秀賞（上級）

私が日本への留学を決めた時「なぜ日本を選ぶの？」「あなたは日本が好きなんですか。」「日本で中国人は変な目で見られるんじゃないの？」ほとんどの友達や親戚は私にそんな質問をした。そんな時私はいつも黙っているしかなかった。と言うのはその時私も日本が好きではなかったからだ。しかし父親は「日本の留学生生活は大変だけれども、あなたの人生に得るところはきっと大きい。日本でたくさんのことを学べばきっと意義があるから。」私にそう言った。そして、去年の10月私はこの桜の国に来た。

日本に来たばかりの頃、留学生らはだれでも道に迷ったことがある。日本語も下手なのではっきり言いたいことが言えない。そんな時日本の親切なおばあさんは私たちを家まで送ってくれる。その上、にっこりして「頑張れ」と言ってくれる。その時“もし日本人が私たちを変な目で見えていたら、私たちを助けてくれないのじゃないか。”と思った。私も迷い子になり、親切なおばあさんのお世話になった。その時私は変な目で見られているとは感じなかった。逆に日本の国民に中国の国民

と同じような親切さと情はじめて感じた。

ある日、友人とインターネットでチャットをしていた。

私「私は今アルバイトをしているわ。」

友人「アルバイト？何か日本人にしてあげるの？」

これを見て私は気分が悪くなった。

私「日本人にしてあげるんじゃないの、自分のためにアルバイトをしているわ。」私はちょっと怒った。

友人「私は歴史科で勉強している。だから日本は好きじゃない。」……

やはり歴史が原因だ。歴史が原因で中日の両民は互いを理解せず、理由もなく嫌っている。それは盲目的ではないだろうか。その日から留学生の責任は勉強だけではなく両国の交流や理解を深めることだと強く感じた。

その後、友達とメールをしたり、電話を掛けたりするたびに、いつも友人たちは「日本の生活はどう？」「日本人はどう？」と聞いた。私も自分に“日本の生活はどう？”と自問した。日本に来て、毎日の授業はおもしろいし、先生も親切だ。授業から生活まで

あらゆる面でいろいろな日本人にお世話になった。本当に大家族のような感じだ。だから、日本の生活は幸せだと思っている。友人にもそう言った。

最近是中国で“羅剛事件”という事件が起こった。羅剛というのは中国のラジオ局のアナウンサーだ。ある日彼の番組の時、ある日本人が電話を掛けてきた。「僕はこの文章を読みたいんですから、断らないでください」と前置きしてから。

彼「僕の国で、すなわち日本で中国人は支那人と言われている。今の中国は“中国”と呼ばれる資格がない。大唐時代の中国しか“中国”と呼べない……その時の中国は世界の中心だった。大唐の文明だけは日本人が崇められるものだ。今の支那は貧乏だし、支那人の素質も悪い……」と言った。友達はインターネットでこの録音を届けてくれた。聞いた後、私はなかなか落ち着かなかった。

歴史の原因で、中国と日本はいろいろな問題がある。中日両国の国民も互いによくわかっていない。中国の人々は潜在意識の中で日本を好ましく思っていない。たぶん日本人も同じように思っている。

私が日本に来てから大体1年になった。この間にいろいろなことを経験した。そして以前思っていた日本に対する印象が全く変わった。私は今中国料

理店とローソンでアルバイトをしている。そこでいろいろな日本人にお世話になった。彼たちは私を変な目でみどころか親切にいろいろなことを教えてくれた。もし日本人が以前私が思っていた通りの人々だったら、彼たちは絶対こんなにも親切に教えてくれないだろう。しかし日本の社会は私たちを受け入れた。日本人が中国人に対して態度が悪いというのは偏見じゃないだろうか。

当然、今の中国は経済や科学や教育などが高速に発展している。いいところもたくさんある。たぶん日本人が思っている中国とは違うと思う。

だから、中国と日本の国民は歴史の問題を越えてよく理解し合えば、友好の橋をかけられるはずではないだろうか。そしてそれは留学生たちの責任であり、役目であろう。

私は医者になりたい

TSASAN TUMURKHOU（モンゴル）ツァサン トムルホー
審査員特別賞（上級）

今から十年前のある夏の日の事です。母は外国へ出張していました。父は私と弟の健康のためにモンゴルの美しい田舎へ私達を連れて車で出掛けました。モンゴルの田舎は日本と違って都市からかなり離れた大草原のことで、そこに暮らす人々は三、四軒で一つの「小さい村」を約十キロごとにつくって生活しているのです。それで私達の行く知り合いの家は家畜を飼っていたからかなり距離のあるところに住んでいました。その日、朝から晴れていて一日中とてもいい天気でした。しかし、夕方になると大きな雲が風に吹かれて来て雨が降り始めました。私の国では雨が長い時間降るのは大変珍しいことです。風が強いから雲がすぐ飛ばされてしまいます。と言うことは大雨が降ってもすぐ止んでしまうと言うことです。最初は雨がポツポツとしていましたがだんだん強くなり道が見えにくくなりました。大雨の中、滑りやすくなった田舎の暗い道を走っていると車はたまにしか通り過ぎません。しかし、前から来た車が突然滑り私達の方へやって来たその瞬間、運転手は慌ててハンドルを切り私達を避けようと

したら狭い道から出て柵にぶつかって三メートルの高さから転げ落ちてしまいました。

目が覚めて見た時、私達は誰かの車の中にいて私の隣に父が寝かされていました。その後のしばらくの事は覚えていませんが何かの声で目を開けました。その時、私は父親を失ったのです。目まぐるしくて動きも出来なくて声も出せませんでした。現実か恐怖な夢か区別できなくて、また意識を失いました。

その時以来、私は命の貴さが分かったのです。そして、人間の命はその人だけの物ではなく、その人を囲む家族や親戚または友人まで関係がある物なんだと分かりました。その人の存在だけで多くの人の幸せが決まるのです。

私はこの世にある全ての物事に理由があると思います。その事によって私の家族一人一人の人生が変わりました。人間には辛い事に遭うたびにそれに溺れて沈んで行く人がいます。また逆に、辛い事に遭うほど強くなり一生懸命生きる人もいます。私の母は私の人生の例です。私は母と同じく難しいことがあってもそれを越えて行ける

精神力のある人間になりたいです。私の愛する母の夢はモンゴルの立派な歯科病院をたて、それでその時代には行われなかった高度な技術での歯の治療をモンゴルの人々に与えることでした。その時のモンゴル人の口腔内の大変な状況を回復するために外の歯科医師にも声をかけて皆に外国で受た研修を広げることでした。また、その希望に協力してくれた日本人のパートナーもいました。しかし、父の突然の死は母にとって羽根を失い飛べなくなったような物でした。それに何もお手伝いできない幼い雛が二羽もいました。でも私の母は悲しみだけを抱きしめて溺れて行く人間ではありませんでした。自分の気持ちを手に握り目的を持ってあきらめずに歩き続けました。それで日本人またはモンゴル人の色々な人達の協力で母のずっとつくりたかった歯科病院が出来たのです。そこでモンゴル人の健康を守るために歯科以外に色々な行事が行われています。また自分たちだけでなく外の歯科医へも声をかけて日本人の先生に教わったことを広げ国全体の歯科医師のレベルを上げようとしています。そんなことが出来ているのはもちろん、私の母が一人で頑張っているわけではありません。皆で力を合わせて目標へ向かっているからです。

こんな母の様子を見て育った私は弱

い人間になって生きることは許されないことでしょう。ですから私は自分が生きている間に出来ること、何のために人生を生きるのかを良く考えています。母をずっと応援し助けてくれた親切な人々に恩を返すために私は何が出来るのか。今、私が思っていることはやはり医科または歯科に関することを勉強することです。人間の命、健康を守ることです。でも私はただ白衣を着て聴診器をつけるだけの医者の方好をする人になりたくありません。人間の体の痛いところだけ治す医者にはなりたくありません。お金持ちになっていい車に乗り、広い家を建てて自分自身だけで生活を楽しむ歯医者などになりたくありません。私のなりたい専門家は病人の病気だけでなく心の傷まで治せる、病人にもっと強く生きる力を与えられる、若い人達にいい模範になれるぐらいの立派な人間になりたいのです。こんな人間、専門家になるために私は全力で努力します。それで私はモンゴル国民の前でモンゴルのために医者になることを誓いたいです。モンゴルでは歯医者も医者と同じく健康を守る職務ですから医者としての誓いを立てます。「私はモンゴル国医師倫理と法律を厳しく守り貴重な人類の生命、健康の為に知識を身につけ熟練し、慈悲深く生きて行くことを誓います。」この誓いを人生の誓約にしてこ

の世の人々に幸福を与えるために、この世に生まれ落ちた役割を果たして生きて行きたいと思います。

講 評

審査委員長 中村 浩一

大阪鶴見ロータリークラブの創立10周年の事業の一つとしてスタート致しました日本語作文コンクールも回を重ね第10回を迎えました。これも偏に関西学友会日本語学校の先生方と留学生のご理解とご協力の賜物と感謝致します。節目の今回も23ヶ国153名（初級60名、中級49名、上級44名）と沢山の方にご参加を頂き有り難う御座いました。審査に付きましては、第一次審査を日本語学校にお願いし、二次審査と最終審査を当委員会で実施致しました。一次審査で選考された各クラスの作文はどの作品をとっても優劣がつけ難く審査員を悩ませました。各クラス、私を含め5名の審査員で審査をさせて頂きました。審査方法は、各審査員に最優秀賞1作品、優秀賞2作品、特別賞1作品を選考、推薦してもらいそれらを集計して受賞候補をあげ、各クラスの審査委員会で受賞作品を決定致しました。特に今回はクラス毎に字数の制限をさせて頂きましたので、その字数の範囲内で内容をまとめなくてはならず少々苦勞をされたのではないのでしょうか。

しかしながらその作文も本当に立派

なものでした。受賞された皆さん、おめでとう御座います。受賞されなかった方も自信を持ってください。母国で多少の日本語の勉強をされたとはいえ日本に來られて間もない皆様方の日本語習得に対する姿勢・習得度に敬意を表したいと思います。全体的にはやはり漢字圏の方々の優位は仕方ないと思いますが、今回も非漢字圏から留学されている方々の健闘に拍手をおくり讃えたいと思います。参加頂いた留学生の皆さん、これを機会に益々勉學に励まれ、楽しい留學生活を健康で過ごされますことを祈念致します。最後になりますが、参加して頂いた留学生の皆さん、そして大変なご協力を頂きました関西国際学友会日本語学校の関係者の方々に感謝申し上げます。有り難う御座いました。

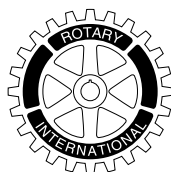
**第10回 日本語作文コンクール
審査委員会**

審査委員長	中	村	浩	一
初級審査委員	石	川	治	均
	林		成	志
	須	田	潤	市朗
	賀	屋	雅	雄
中級審査委員	内	田	吉	穂
	岡	田		彌
	田	中	信	明
	矢	尾	和	彦
上級審査委員	秀	島	博	規
	中	村	善	尚
	清	水	正	憲
	菊	井	康	雄

**大阪鶴見ロータリークラブ
国際交流基金運営委員会
(2003 ～ 2004)**

委員長	中	村	浩	一
副委員長	秀	島	博	規
委員	清	水	正	憲
	内	田	吉	穂
	矢	尾	和	彦
	石	川	治	均
	林		成	志

禁・無断転載（転載ご希望の向きは下記にご連絡下さい）



**大阪鶴見ロータリークラブ
国際交流基金運営委員会**

〒 534-0026 大阪府大阪市都島区網島町 9-10 太閤園内
電話 06-6357-8171 FAX 06-6357-8011